
ある日どこかで...

志崎 洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日どこかで…

【Nコード】

N9224B

【作者名】

志崎 洋

【あらすじ】

「あつまま！ここにいたのね」と、見知らぬ少女が目の前に現れた…。驚きの結末と心温まるファンタジーの世界。

俺と彼女が公園でデートをしている時に、その女の子は俺たちの前に現れた。

「あつまママ！ここにいたのね」

突然、その子が彼女に向かってこう言ったので、俺はびっくりして彼女の顔を見た。

「キ、キミの子かい？」

「ま、まさか！じよ、冗談よ。バカね」

あまりの突然の女の子の言葉に彼女は憤慨した顔になった。それもそのはずだ、どう見てもその子は三つか四つだし、俺と彼女のつき合いはそれよりはずっと長い。それに、彼女とのデートは月に二、三回は必ずしているから俺の知らない間に子どもをつくれるわけがない。

彼女は気分を取り直してその子に言った。

「ごめんなさい。私はあなたのママじゃないのよ」

何もあやまることはないと思ったが、俺はそんな彼女の優しさが好きだった。

しかし、その子はさらに俺の彼女に向かって言った。

「うっん、ぜったいにママよ。まちがいないわ」

俺は頭にきた。

「こらっ、いいかげんにしろ！大人をからかうんじゃない」

「おやめなさいよ！相手はまだ子どもよ」

たしかにそうだ。つい大きな声を出した自分が恥ずかしかった。

「ねえ、お名前は何て言うの？」

彼女は女の子に優しく声をかけた。

「わたし？サチコ。みんなサツちゃんてよぶわ」

「そっ、サツちゃんていうの。可愛いわね」

いつのまにか彼女は女の子の手を握りしめていた。彼女がこんな
に子どもが好きだったなんてちよっぴり驚いた。

「ねえ、サツちゃん。私の顔をよく見てごらんなさい。ママの顔
じゃないでしょ？」

女の子は彼女の顔をじつと見回した。

「ほんとだ。本当のママよりずっと若いわ」

彼女はほっとしたような顔つきで俺の方を見た。俺もなぜか安心
したような気分になって、それに何だかこの子がかわいく思えてき
て頭をなでてあげた。

「やれやれ、やっとわかってくれたか」

「ママも若いけど、パパも若い顔してる」

「なに？」

アハハッと声をあげて笑ったのは俺の彼女の方だった。

「今度は俺のことをパパと言いやがった」

俺はもう少しで、「お前、頭おかしいのか？」と言いつうになっ
たが、ぐっとこらえた。何といっても相手はまだ子どもだ。真剣に
相手をするところちがくたびれると思った。

「楽しい子ね。どこの子かしら？」

俺と彼女で辺りを見回したが、どこにもこの子の親らしいのは見
つからなかった。きつとどこかで迷子になってしまったのだろう。
そして、迷ってこの公園に来てしまったにちがいない。

「まあ、そのうちこの子の親もこの公園までさがしに来るだろう」

「そうね。かわいそうだから、それまでこの子と遊んでいてあげま
しょう」

俺と彼女でそんな話をしていると、その子はいつのまにか俺たち
の座っているベンチの上にちゃっかりと腰かけていた。まったく近
頃の子どもは図々しいというか、俺たちはあっけにとられた。しか
し、俺も彼女も不思議とその子に親近感を覚えた。

「ねえ、サツちゃん。お家はどこなの？」

「わからない」

「そう、困ったわね。何かして遊ぼうか？」

「うん！」

女の子は大きくうなずくと、本当にうれしそうな笑顔を見せた。

「何して遊びたい？」

「ブランコ！」

そう言うと、その子は俺の彼女の手を引いてブランコの所までかけていった。そして、ブランコに女の子がとび乗ると、その子の背中を彼女が優しく押してあげた。知らない人を見るとそれはまるで本当の母子のようであった。

俺の彼女もけっこうそれを楽しんでいるみたいだし、俺にはそんな童心に返って無邪気に遊んでいる彼女がとても魅力的に見えた。時々二人でキャッキャツと声を出しながら本当に楽しそうだ。

しかし、一体これはどうなっているんだ。

「くそつ、今日のデートは台なしだな！」

俺はだんだんと腹が立つてきた。せつかくの二人きりのデートだったのだ。それをなぜあんなわけのわからない子どもに邪魔されなければならぬんだ。

すると、女の子がこっちにかけてくるのが見えた。

「ねえ、パパもおいでよ。いっしょにあそぼう！」

「おいっこらっ、いいかげんにしろ。俺はおまえのパパなんかじゃないぞ！」と言いそうになったが、ブランコの方で彼女がしきりに手をふっているの、俺は仕方なく女の子の手の引かれるままについて行った。

「パパもつれてきたよ」

「アハハッそうね、パパも来たわね」

彼女は俺がパパと言われたのがやたらとおかしらしく笑いこぼれた。

俺はまったくおかしい子だと思ったが、まあ仕方がない、ここは

一つパパ役になってやるかと半ばあきれて女の子に言った。

「ようし！パパがこいであげるから乗ってごらん」

「うん！」

その子はうれしそうにうなずくと俺のひざの上にとび乗った。女の子の柔らかな肌が俺のひざに伝わって心地良かった。

「ようし、しっかりつかまってるよ。いくぞ！」

女の子はキヤーと言いながらもうれしそうにはしゃいだ。俺は空が逆さまになるぐらいにこいでやった。ブランコがこんなに楽しいものだとは知らなかった。俺までうきうきとして、夢中になってこいでいた。

「ああ、たのしかった」

「そうね。ねえ、サツちゃん。今度は何して遊びたい？」

「うん。すべりだい！」

「そう、すべり台。じゃあ行きましょう！」

何のことはない、それから俺たち二人は、その子といっしょにすべり台やらシーソーやら公園中の遊具を全部遊ばさせられたのだった。

もう辺りも夕暮れて、公園には俺たち三人以外は誰もいなくなっただけだった。

「ねえ、サツちゃん。楽しかった？」

彼女は女の子の手を握りしめながら優しい声でたずねた。

「うん、とってもたのしかった」

女の子は満足したようにこっくりとうなずいた。

「ありがとう、パパとママ」

まだ言つてやがると思ったが、まあそう思い込んでいるのなら仕方ないと俺たちは黙っていた。

「わたしね、ゆめ見ていたの。パパとママがとってもなかよしで、サツちゃんと公園でいっぱいあそぶの。だから……だからきょう……」

とつてもたのしかった」

そう言いながら女の子は目から大粒の涙をこぼした。何かわからないけれどその涙を見て俺まで胸に熱いものが込み上げてきた。それは俺の彼女も同じだった。彼女も女の子の手を固く握りしめたまま涙があふれ出るのをこらえきれないでいた。

「わたしたちこそありがとう、サツちゃん。とつても楽しかったわ」
「うん、やっぱりママの言っていたことは本当だったね」
「ええっ？」

不思議なことをその子が言ったので俺たちは聞き返そうとしたがやめた。またこっちまでおかしくなりそうだったからだ。

「わたし、もう帰る」

「帰るって、あなたお家知らないんでしょ？」

「ううん、お家じゃないの」

「えっ、じゃあどこに帰るの」

「おい、やめとけよ。帰るって言うんだからいいじゃないか」

何だか薄気味悪くなって、俺は彼女に言った。

「パパ」

「ええっ？」

「ママが言っていたわ。パパが悪いんじゃないって」

またおかしいことを言い出すと、俺は思った。

「パパはお仕事でいそがしいからお家に帰ってこないんだって。そして、結婚する前は本当にやさしくて、ママをとつても愛してくれていたんだって」

「おい、おい待てよ。俺たちはまだ結婚なんかしてないぞ！」と言いきりになったが、なぜかその子が俺たちの本当の子どものような気がしてきて、言葉が出てこなかった。

「さようなら、パパ、ママ」

「サ、サツちゃん！」

俺たちは同時にその子を大声で呼んだ。すると、みるまに女の子の姿が消えかけていった。

「パパ、ママ。わたし、ちっともうらんでなんかいないわ。だってパパとママはこんなに愛しあっていたんだもん。ママ、本当に幸せだったんだね。……わたしをころしてまでもパパを愛していたんだね……」

女の子の姿が空気の中にすうつと消えた。

その女の子の消えた場所に小さな紙切れが残っていた。それは小さな新聞記事の切り抜きだった。

「サツちゃん！……あなたは！……ゆ、ゆるして……！」

彼女はもう消えてしまっている女の子に向かってそう叫んだ。

俺には女の子の最後の方の言葉はよく聞き取れなかったが、彼女のゆるするという声が残った。それはまるで、俺の方にも向けられたような気がしたからだ。いや、むしろ俺もその女の子にゆるしておくれと、叫びたい気持ちだった。

もう、あの女の子はどこにもいなかった。

日が暮れた公園に俺たち二人だけが残った…。

あとがき

少女は過去に来た。

二人は未来を見た。

時をこえた愛がそこにある……

ある日、新聞に小さな記事が載っていました。

「若い母親が幼い子を道連れに無理心中を図る。」

夫に冷たくされ思い悩んでいたらしい……」

このショートストーリーはその記事をモチーフにしたものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9224b/>

ある日どこかで...

2010年12月29日02時17分発行